

七里の渡し場跡にある 伊勢国一の鳥居 建て替えへ

伊勢国東の玄関口、神と人の心をつなぐこの鳥居は、式年遷宮ごとに、伊勢神宮 宇治橋の鳥居を移して、建て替えられます。

七里の渡しはいつできたの？

慶長6(1601)年に、徳川家康により江戸と京都を結ぶ東海道が制定され、桑名宿と宮宿(名古屋市熱田区)の間は東海道唯一の海路として結ばれました。宮の渡しから桑名まで海上七里あったため「七里の渡し」と呼ばれています。

七里の渡し場に鳥居が建てられたのは、天明年間(1781~1789年)と考えられています。鳥居は、桑名の商人の矢田甚右衛門と大塚与六郎が発起人となり、関東地方を廻って寄付を集めて建立されました。当初は、東海道を跨ぐように、道路の上に建てていたと伝わっています。また、七里の渡し場跡にある鳥居は「伊勢国一の鳥居」と呼ばれています。これは、東国から来た旅人たちにとって、七里の渡しから桑名に着くと、この鳥居をくぐって伊勢国に入る、東の玄関口にあたるからです。

七里の渡し場跡の鳥居は、 式年遷宮ごとに建て替えられるの？

伊勢神宮の宇治橋外側の鳥居が、20年に一度の式年遷宮ごとに桑名市の七里の渡し場跡に運ばれ、建て替えられます。この宇治橋の鳥居は、さらに20年前の式年遷宮で、外宮正殿の棟持柱として使われていた材で建てられており、由緒あるものです。

ちなみに、宇治橋内側の鳥居は西の入り口である、関の追分(亀山市関町)で同様に建て替えられ、こちらは内宮正殿の棟持柱として使われていました。



七里の渡し場跡にある現在の一の鳥居



平成5年の式年遷宮後、平成7年に七里の渡し跡場での一の鳥居が建て替えられる様子



昭和初期の七里の渡し跡 (昭和9年 伊勢大橋竣工記念の絵はがき集より)

いつ建て替えられるの？

平成27年5月31日(日)「お木曳き」(神宮から用材が桑名にやってくる奉祝行事)を行い、6月7日(日)に竣工式を予定しています。

また、平成27年5月30日(土)には、「全国山・鉾・屋台保存連合会総会桑名大会」が開催されます。伊勢国一の鳥居を桑名ブランドとして全国にPRし、広めていきます。